

苦しみの意味〔要約〕

哀歌3:17~24

- 17 「私のたましいは平安から遠のき、私はしあわせを忘れてしまった。
- 18 私は言った。『私の誉れと、主から受けた望みは消えうせた』と。
- 19 私の悩みとさすらいの思い出は、苦よもぎと苦味だけ。
- 20 私のたましいは、ただこれを思い出しては沈む。
- 21 私はこれを思い返す。それゆえ、私は待ち望む。
- 22 私たちが滅びうせなかつたのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。
- 23 それは朝ごとに新しい。『あなたの真実は力強い。
- 24 主こそ、私の受ける分です』と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。」

「哀歌」というタイトルは、元のヘブル語では「エーハー」と言い、「ああ、なぜ」という悲嘆に暮れた一言が由来となっています。著者のエレミヤがこの哀歌を歌った背景には、神様が選ばれた場所エルサレムが徹底的に破壊されたことにありました。

エジプトの奴隷であったイスラエルの民を、奇跡によって神様が導き入れたのがイスラエルの地でした。そして、後にソロモン王が国を治めた時、首都エルサレムには荘厳な神殿が建てられました。神殿が建てられた時、神様自身が「わたしの名をそこに置く」と認めてくださった素晴らしい場所でした。しかし、すぐにイスラエルは主を裏切り、外国の偶像に傾倒していきましました。神様は、預言者を通して、悔い改めるよう語り掛けましたが、民は悔い改めませんでした。彼らは神様を忘れ、自分の好きなように生きました。その結果、神様はこの国を捨てられたので、異教の国、新バビロニア帝国によって滅ぼされることとなります。

エレミヤは、そんな国の最期を看取った預言者です。若くから、神様に命じられて孤独の戦いをしてきました。彼は、民を心底愛していました。しかし、語れば語るほど、民は彼を拒絶しました。しまいには神様から「語っても悔い改めることはないが、それでも語れ」と言われます。こんなに理不尽で、無益に思えることはありません。彼は語るのをやめたいと思いましたが、語らない事は彼にとってそれ以上の苦痛でした。

皆様の、一番救われて欲しい人を思い浮かべてみてください。もし神様から、「その人は悔い改めないが語りなさい」と言われたら、それでも語れるでしょうか。しかも語ったら語ったで、その人から憎まれるのです。エレミヤにとってみことばは、どうしても語らずにはいられないものだったのです。結局、その生涯をみことばを語ることに捧げたものの、結果だけ見るなら誰も悔い改めず滅びていくという悲惨な結果をたどりました。この哀歌は、その時に書かれた歌なのです。哀歌1:1~18をお読みします。

- 1 私は主の激しい怒りのむちを受けて悩みに会った者。
- 2 主は私を連れ去って、光のないやみを歩ませ、
- 3 御手をもって一日中、くり返して私を攻めた。
- 4 主は私の肉と皮とをすり減らし、骨を砕き、
- 5 苦味と苦難で私を取り囲んだ。ずっと前に死んだ者のように、
- 6 私を暗い所に住ませた。
- 7 主は私を囲いに入れて、出られないようにし、私の青銅の足かせを重くした。
- 8 私が助けを求めて叫んでも、主は私の祈りを聞き入れず、
- 9 私の道を切り石で囲み、私の通り道をふさいだ。
- 10 主は、私にとっては、待ち伏せしている熊、隠れている獅子。
- 11 主は、私の道をかき乱し、私を耕さず、私を荒れすたさせた。
- 12 主は弓を張り、私を矢の的のようにし、
- 13 矢筒の矢を、私の腎臓に射込んだ。
- 14 私は、私の民全体の物笑いとなり、一日中、彼らのあざけりの歌となった。
- 15 主は私を苦味で飽き足らせ、苦よもぎで私を酔わせ、
- 16 私の歯を小石で砕き、灰の中に私をすくませた。
- 17 私のたましいは平安から遠のき、私はしあわせを忘れてしまった。
- 18 私は言った。『私の誉れと、主から受けた望みは消えうせた』と。」

エレミヤは、エルサレムのことを自分のことのように悲しみます。昔味わった神様からの喜びももはやなく、神様に捨てられた身として、なんの望みもない。そんな風に語っているように聞こえます。クリスチャンになつたらすべて上手くいくどころか、むしろ「上手くいかない」「挫折だらけ」のように思えます。エレミヤが孤独の戦いへ導かれ、愛する人々から憎まれたように、私たちも「神様に従っているのになぜ」と言いたくなるような瞬間があるかもしれません。神様に愛されているところが、「神様から憎まれている」んじゃないかと思う程に、理不尽なこともあるかもしれません。

そんな時、私たちは、自分の中のアイデンティティに向き合わされます。「自分はなぜ、なんのために生きているんだろうか。今まで信じてきたと思っていたものは一体何だったんだろう。」と。答えのない苦しみを、私たちはどう受け止めたらよいのでしょうか。続く哀歌19~21をご一緒に読みましょう。

- 19 私の悩みとさすらいの思い出は、苦よもぎと苦味だけ。
 20 私のたましいは、ただこれを思い出しては沈む。
 21 私はこれを思い返す。それゆえ、私は待ち望む。

「答えがない時」「先が見えない時」は、ただ苦しいだけです。しかし、最後の一行でエレミヤは別の領域に「目を向けます。それは神様に対してです。辛い現実が目の前に迫るとき、私たちは「現実に向き合う」か「現実から目を逸らす」という選択をすることになります。しかし、目を逸らしても解決しない、向き合うにしなくても、心が受け入れられないほど大きい。そんな時、私たちはエレミヤのように、沈んで浮き沈みを繰り返すことになり、繰り返すことになり、当たり前です。私たちは一人の人間だからです。ですが、ここでクリスチャンだけが「神への信頼」つまり信仰を試されます。誰かに期待することは、その人への信頼がなければなりません。ヤコブ1:16~17をお読みします。

- 16 愛する兄弟たち。だまされないようにしなさい。
 17 すべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物は上から来るのであって、光を造られた父から下るのです。父には移り変わりや、移り行く影はありません。

私たちの神様は、良い物しか生み出せません。また悪を行いません。罪がないからです。人は皆、罪人なので、どんな人であっても、信頼できない面が必ずあります。しかし、神は悪を行いません。正しいことを行われ、裏切らず、難癖をつけたりはされないのです。つまり、たとえどんな辛い状況にあっても、神は信頼し切るに足るお方ということです。しかし人は、あまりにもひどい状況の中、神に信頼し切ることが難しく感じられます。それは私たち人間の側に問題があるのです。エペソの1:3~4をお読みします。

- 3 私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちに祝福してくださいました。
 4 すなわち、神は私たちが世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。」

神様には私たちにに対してご計画をお持ちです。それは、やがて「傷のない者」として神様の御前に立つというご計画です。神様は、私たちとの信頼関係を回復して、傷なしにしようと働いてくださっているのです。「選び」という言葉が書いてあります。神様が私たちを選んでくださったところから、私たちと神様の関係は始まりました。どのようにしてでしょうか。神が、ご自分の御子を私たちの代わりに罰し、死に至らしめ、私たちの代わりに捨てられることによって、です。キリストが私たちの代わりに罰を受けられたので、もはや私には罰はありません。キリストが捨てられたので、もはや私たちは捨てられません。このことを信じられますか？

神様の願いは、私たち一人一人と、濁りのない真っ直ぐな信頼関係を築くことです。親が「買い物に行つて、一時間以内に帰ってくるから」と子供に家の留守を預けたとします。その子はすぐに不安になってしまつて、うしろかもしれません。しかし親が約束を守って帰って来てくれるれば、子どもは親に対して安心します。そして二時間、三時間と増えて行つても、不安にも思わなくなるでしょう。同じように、私たちがみことばを心から信じ、神様に信頼できるようになるため、神様はすべての試練を与えて下さっています。傷は、痛いもので、出来ればどこかに隠しておきたいものです。しかし、主のみこころは、私たちがありのままの痛みを主に告白し、主に信頼することです。そうして私たちは、神様を信頼するゆえに平安を得ることができ、信じて期待するとき、そこには必ず希望があります。しかし信じられない時、そこにはあきらめか、あるいは妥協、もしくは失望が伴います。皆様が神様に見出すのは、希望でしょうか。あきらめ、失望でしょうか。哀歌3:22~24を皆さまでお読みしましょう。

- 22 私たちが滅びうせなかつたのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。
 23 それは朝ごとに新しい。『あなたの真実は力強い。
 24 主こそ、私の受ける分です』と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。」

エレミヤは、もう目の前の辛い現実、悲嘆してはいませんでした。苦しみはそこにあるけれども、神様が自分たちを見捨てていない事を知ったのです。エレミヤは「あなたの真実は力強い」「受ける分」と続けて告白されています。現実は今、その約束の土地が異国人に侵略され、没収されたところ、見える希望を失いました。しかしエレミヤは、本当に神様が与えようとしておられるのは神様御自身なのだと言っているのです。私たちも、大切なものを失う、そのような時、どこに頼るかを試されます。または、何に頼っていたかを明らかにされます。でも、何があっても答えは神様だけです。神様だけは私たちから失われることのないお方、本当の慰めです。エレミヤ29:10~14をお読みいたします。

- 10 まことに、主はこう仰せられる。『バビロンに七十年の満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにわたしの幸いな約束を果たして、あなたがたをこの所に帰らせる。
 11 わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ——
 12 それはあなたがたではなくて平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。
 13 あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。
 14 もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つかるだろう。
 14 わたしはあなたがたに見つけられる——主の御告げ——わたしはあなたがたの繁栄を元どおりにし、わたしがあなたがたを追い散らした先のすべての国々と、すべての場所から、あなたがたを集める——主の御告げ——わたしはあなたがたを引いて行った先から、あなたがたをもとの所へ帰らせる。』

事実この言葉通り、再びエルサレムは建てられ、民は戻ってくることになりました。私たちも、主に立ち返るなら、必ず回復が用意されています。今まで向き合っていなかったこと、辛くて封じてしまったこと、今向き合っていること。もし今日示されたならば、主を信じてみことばに信頼してみませんか？